

老いやつれた母の写真を見て、前にきていた母の手紙を読みかえました。

『おまいの。しせにわ。みなたまけました。わたくしもよろこんでをります。……はるになるト。みなほかいドに。いてしまします。わたくしもころぼそくあります。ドカはやく。きてください。……はやくきてください。いしよのたのみて。あります。にしさむいてわ。おかみ。ひかしさむいてわおかみ。しております。……』

英世は、母の写真と手紙を前にして、頭を下げ、

「わたしは、母の苦勞によつてはげまされ、母の愛によつて勇氣づけられました。だから、今日の野口英世があるのです。」

と、自分の親不幸をわび、今は研究のことをすべて忘れて、母のもとに帰る決意をしました。

十五年ぶりに、日本に帰った英世は、すぐに、三城瀉の母のもとにいきました。